

上海・蘇州旅行記

右城 猛 Ushiro Takeshi

まえがき

今年の7月3日、「5年前から上海で建築設備の設計の仕事をしている。右城さんのホームページを見て懐かしくなったので」という電話が内海和志君からかかってきた。

彼は1973年に徳大の工業短期大学部土木工学科を卒業して、私が当時勤務していた四国建設コンサルタントに入社してきた。姫路市の出身で、年齢は私より一つ下であったが、すでに美枝子さんと結婚し、彼女の実家がある羽ノ浦町に住んでいた。明るくお人好しで社交的な性格をしているので、私と気がよく合った。私のアパートによく遊びに来ていたし、彼の家で泊まったこともあった。

彼は3年半後に四国建設コンサルタントを退職し、建築設計の仕事をするようになった。一時は第一コンサルタンツの補償コンサルタントの仕事を手伝ってもらっていたこともある。ときどきは連絡を取り合っていたものの、ここ20年ほどは会っていなかったもので、観光を兼ねて彼に会いに行くことにした。

旅行は、ANA ハローツターの「旅ドキ上海 4日間」という3泊4日のツアーを利用した。旅の日程は次の通りである。

月日	予定
9月20日 (土)	半日上海市内観光(金茂タワー、豫園) 上海黄浦江ナイトクルーズ
9月21日 (日)	内海夫妻と上海市内観光 内海夫妻、谷夫妻と新天地でディナー
9月22日 (月)	蘇州日帰り観光(拙政園、運河めぐり、寒山寺、虎丘) 上海雑伎団鑑賞
9月23日 (火)	上海浦東国際空港 12時5分発で帰国

宿泊ホテル

花園飯店上海(オークラガーデンホテル上海)

高知から上海へ

心配した台風13号は、四国沖を北東へ通り過ぎ、出発の9月20日には秋晴れが広がっていた。

高知龍馬空港のANAカウンターでスーツケースを預け、8時25発のボンバル機で関西国際空港へ飛び立った。関空着は9時5分。4階の国際線乗り場の中央団体カウンターのANAハローツター係で飛行機の切符をもらい、それを持ってANAのカウンターで搭乗手続きをする。

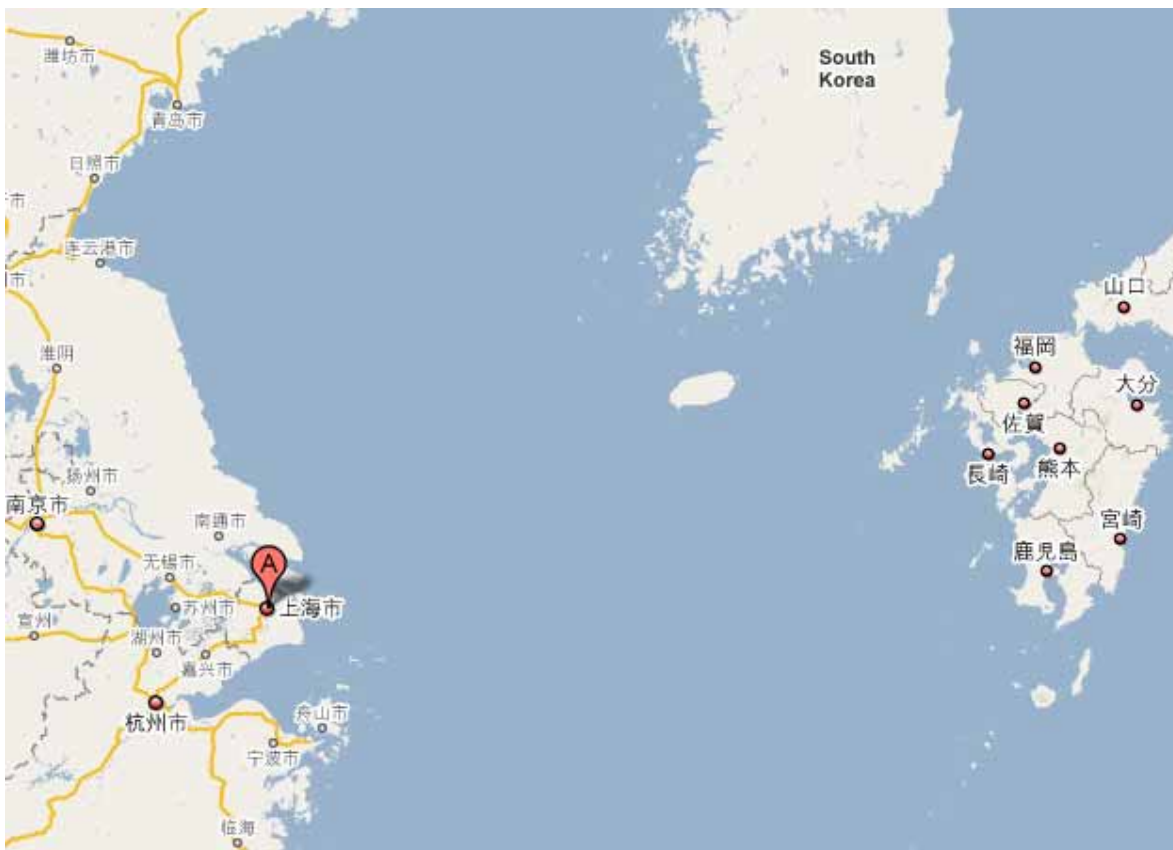
手元の時計を見ると9時20分。9時35分までに14番ゲートに行かなければならない。時間の余裕はほとんどなかったが、関空の銀行で中国人民元と両替をする。レートは一元が17.36円。後で分かったのであるが、上海で両替すれば16円。日本のレートが良いと思ったのに悔しい。

手荷物検査を済ませ、3階に降りて出国審査。北ウィングシャトルの中間駅で下車。14番ゲートに着いたのは9時40分。5分の遅刻であったが、搭乗のアナウンスは9時50分。トイレに行き、ミネラルウォーターを買う時間も十分あった。

関空10時発予定のANA155便は、10時20分に関空を離陸。乗客は定員の1/3程度。空席が目立った。離陸してすぐに機内食がでた。満腹になって少しうとうとしていると着陸態勢に入るといったアナウンスで目が覚める。

窓から機外を眺めると、海の色が茶色に濁っている。黄浦江から泥水が流れ込んでいるのである。これでは上海の沿岸に魚は棲めないだろうと思った。中国の漁船が日本の海域まで侵入してくる理由が分かったような気がした。

現地時間の11時20分、上海浦東(Pudong)国際空港に着く。時差が1時間であるので、関空を出発してから2時間が経過していた。飛行機が着いたのは、今年の3月にオープンしたばかりの第2ターミナル。飛行機を降りると暑さでむっとする。



上海の位置図

今日の最高気温は 33 度だそうであるが、湿度が高いのでサウナにでも入っているような暑さを感じる。

入国審査をすませ、スーツケースを受け取って到着ロビーに出ると、現地ガイドの女性が「ANA ハローツアー、USHIRO 様」と書いた紙を持って迎えに来てくれていた。

上海航空に所属している鮑小燕(ホウ・ショウエン)という美人で明るく聡明な 25 歳の女性。専門学校で日本語を学び、難関のガイドの資格試験に合格し、ガイド歴 3 年。日本人観光客を専門にガイドをしている。毎日は仕事がないので会計士を目指して勉強をしているということであった。年齢が下の娘と同じなのでよけい親しみをもった。日本には一度も行ったことがないというのに、日本の地名や歴史、政治に詳しい。日本の観光客から得た知識のようである。

迎えのワゴン車に乗ってはじめてツアーの参加者が、私と妻の二人だけであることを知った。最近では日本からの観光客が少なくなっているようである。日本の景気を反映しているのだろう。



上海の海は茶色に濁っている



上海浦東国際空港ターミナル



3月にオープンしたばかりの第2ターミナル



上海トランスラピッドの軌道



発着ロビーの入り口



高層ビルマンション



第1ターミナルへのアクセス道路



マンションの窓に干した洗濯物

上海市内半日観光

11時40分、6人乗りのワゴン車に乗って上海市内へ向かう。道路に平行して走っているモノレールのような軌道が目に入った。2004年に営業運転を世界で最初に始めた上海トランスラピッド(リニアモーターカー)の軌道である。現在は上海浦東国際空港と地下鉄2号線龍陽路駅の30km

間を結んでいるだけだが、2010年までには杭州まで開通する予定になっている。高速道路の建設工事も急ピッチで進められている。上海は2010年の国際博覧会に向けて街中が建設ラッシュ。活気が溢れうらやましい限りである。

空港から約1時間で上海市街に着く。上海市街に入ると高層ビルが目立つ。さすが人口1850万人の大都市である。

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

・金茂タワー(ジンマオタワー)

最初に案内されたのは、近年急速に整備が進められている浦東(Pudong)新区の金茂タワー。高さ420.5m、88階の超高層ビルで、最上階は有料の展望台として公開され、人気の展望ポイントとなっている。53階から87階には、ホテル「グランド・ハイアット上海(金茂君悦大酒店)」がある。ホテルより下は様々なオフィスが入っている。地下1回はサラリーマンのためのレストラン。

88階の展望台には、速度9m/秒の三菱製高速エレベーターであがる。最上階までの所要時間は、わずか45秒。金茂タワーから上海中心部の摩天楼を展望することを楽しみにしていたのに、モヤがかかってよく見えない。モヤは天候のせいだけではなく大気汚染が原因。滞在最後の日は晴天であったが、それでも遠方は霞んでいた。

金茂タワーの前には、森ビルが建設した超高層ビル「上海ワールドフィナンシャルセンター(SWFC)」が立っていた。頂部に四角い穴が開けられているのが特徴。94階と97階、100階の3カ所が展望台になっている。100階の展望台「スカイウォーク100」は高さ474mで世界一。最近では、金茂タワーよりも森ビルが展望スポットとして人気があるとのこと。



広角レンズがないと全体を写せない金茂タワー



金茂タワーへの入り口。エレベーターで地下に降りて、地下1階から三菱製の高速エレベーターで88階展望台にあがる。



2010年上海国際博覧会のマスコット「海宝」。「人」という文字をデザインした人形。



展望台から眺めた摩天楼(高層ビル)が立ち並ぶ浦東エリア。霧がかかってよく見えない。



上海のシンボル東方明珠電視塔



88 階の展望台に置かれている金茂タワーの写真の前で記念撮影



金茂タワーと並んだ「上海ワールドフィナンシャルセンター」。頂部に四角い穴が開いているのが特徴。100 階が展望台「スカイウォーク 100」

・点心料理

黄浦江の下を潜っているトンネルを通して対岸の浦西(pusai)に行く。浦東は元々湿地帯であったところを約 15 年前に開発して造られた新しいエリアであるが、浦西は古くから発展してきたエリアである。

13 時 30 分、点心料理が評判の中華レストランで昼食をとる。料理のメニューは、野菜の油炒め、ビーフン、2 種類の小籠包、シュウマイ、春巻きなど。美味しいのであるが機内食を食べてまだ 3 時間半しか経っていないので、食欲がわかない。もったいないが半分は食べられずに残す。

「点心」という名前は禅語『空心(すきばら)に小食を点ずる』からきたという説や、心に点をつけることから心に触れるものと言う説がある。明確な定義はない。食事の間に少量の食物を食べることなので、菓子や間食、軽食の類いは全て点心と呼ばれる。中国の朝ご飯は点心ですまされることが多い。

上海のレストランでは、注文をしなければ水は出てこない。水を頼むとお湯を持ってきた。ガイドの説明では、生水は飲めないなので沸かすため。冷たい水を飲みたければ氷を入れるように頼まなければならないとのことであった。



昼食の点心料理



豫園商城の前の道路



レストランの窓から眺めた街の風景。摩天楼の背後には古い建物が残っている。



豫園商城の入り口

・豫園(ヨエン)

豫園は、明代に四川省の役人であった潘允端(パン・ユンドウアン)が父のために造った庭園。世界遺産には指定されていないが、上海観光のスポットになっている。

豫は愉のこと。豫園は愉快的な庭園という意味。面積約2万平方メートルの園内には大小さまざまな楼閣があり、屋根に龍の彫刻を乗せた龍壁で隔てられている。堂の屋根はことごとく反り返っている。いかにも中国建築らしい。

「豫園商城」と書かれた大きな看板の下を潜って中に入ると、通路の両側には古いの建物が並び、土産物やレストランが入っている。

今日は観光客が比較的少ないようであるが、それでも結構混雑していた。東京の浅草のような雰囲気がある。

クリントン大統領が立ち寄ったという店もあり、大きな写真が貼られていた。



通路の両側に土産物屋やレストランが並ぶ



中国建築様式の古い建物が軒を並べている



クリントンが食事をしたレストラン



池と回廊



140年の歴史を持つ茶楼「湖心亭」



豫園を代表する竜壁。竜は皇帝のシンボルなので臣は竜を造れなかった。爪を3本として竜ではないと追求を逃れたと言われている。

土産物店の奥には錦鯉が泳いでいる池があり、池の中心に屋根の反り返った明代の風情あふれる建物がそびえている。上海でもっとも古い140年の歴史を持つ茶楼「湖心亭」である。

池にはジグザグに折れ曲がった木橋「九曲橋」が架かっている。「人間はジグザグに歩けるが悪霊は真っ直ぐにしか進めない」という言い伝えがあり、悪霊は池に落ちてしまうのである。

九曲橋を渡って白壁の中に入った所が豫園。いたるところに太湖石(たいこせき)が使われている。太湖石とは上海の北西約70kmにある太湖から産出される石で観賞用に重宝されている。

瘦せて薄くすけて見えること、しわが多いこと、穴が多くて中につながっていることなどが名石の条件である。中央の石がその条件に最も近く、名石中の名石で玉玲瓏(ぎょくれいろう)と呼ばれている。

ちなみに、太湖は中国で4番目に大きく、琵琶湖の3倍の面積をもつ湖である。



屋根の瓦にも竜のシャチホコが使われている



中央の高さ約 3m の太湖石が玉玲瓏



壁を円形にくり抜いた月亮門(ユエリャンメン)



太湖石の穴に左右の手を入れ、中で両手がつなげたら美人。妻もなんとかつなげたらしい。



庭園の見物を終わると、豫園商城内の建物の4階にある中国茶専門店「陸羽茶藝館」に案内された。ロンジン茶、ウーロン茶、ジャスミン茶などを試飲させられ、結局は野生苦丁茶(くていちゃ)75gを380元、紫砂という陶土で作った中国茶が最高に美味しくなるという茶器を570元で買われた。かなりぼったくられたような気がする。



借景のため壺の形に塀をくり抜いている



中国茶を買った陸羽茶藝館のベランダで撮影



陸羽茶藝館のベランダからの豫園商城の建物



ベランダから眺めた豫園商城の建物



陸羽茶藝館ベランダからの眺望。一番高いのが森ビルで二番目に高いのが金茂タワー。

外灘と黄浦江ナイトクルーズ

豫園の観光を終えた頃に雨が降り出したので、花園飯店にチェックインする。時刻は 16 時。ホテルで風呂に入り、服を着替えて、18 時に外灘 (ワイタン, BAND) の観光と黄浦江(こうほこう)のナイトクルーズに出かける。

外灘とは中山東一路から中山東二路までの黄浦江西岸沿いのエリア。この一帯は租界地区であ

ったことから「外国人の河岸」(外灘)が名前の由来。租界時代の西洋建築が並び、上海の観光エリアとなっている。

租界(そかい)とは、行政自治権や治外法権をもつ外国人居留地のこと。阿片戦争後の不平等条約により中国大陸各地の条約港に、イギリス租界、アメリカ租界、フランス租界、日本租界など設けられた。

外灘(ワイタン)の北側に位置する黄浦江沿いにある黄浦公園に行くと、観光客や地元の若者でごった返していた。ここから外灘と東浦地区の眺めを楽しむことができる。黄浦江の外灘側の波止場には、ナイトクルーズ用の観光船がたくさん係留されていた。

19 時より黄浦江のナイトクルーズ。クルーズに乗って上海の 100 万ドルの夜景を満喫する。陸地からとは違った外灘や浦東の夜景を楽しむことができる。所要時間は 20 時までの 1 時間。19 時 30 分より外灘や浦東のライトアップが始められる。



派手な照明を付けた船に乗ってナイトクルーズ



浦東地区がライトアップされて美しい



ライトアップされた補東エリアの夜景



左のタワーは上海のシンボル東方明珠電視塔



外灘の夜景



現地ガイドの鮑小燕(ホウ・ショウエン)さん

花園飯店上海

3日間とも花園飯店上海(オークラガーデンホテル上海)に宿泊する。錦江国際グループと野村證券グループが共同出資し、ホテルオークラが運営する上海で唯一の日系ホテル。ホテルの前には大きな庭園がある。

1989年に錦江クラブ(旧フランスクラブ)を補修改装して33階の客室棟が竣工されている。

従業員は全員が日本語を話せる。トイレは日本のホテルと同様にウォッシュレット。テレビではNHKのBSが放送されていた。日本人の宿泊客が多い。

インターネットが使えるので、毎日使用していた。ところが、チェックアウトのときにびっくり。インターネットの電話代を402元も請求された。

中国のホテルには飯店、酒店、賓館という名称が使われている。ガイドによると、北京では飯店、南の広州では酒店が多いが、上海は中間なので飯店、酒店、賓館のすべてが入り混ざっているということであった。昔、酒を飲むことが禁止された時期があったが、宿泊客だけには酒を飲ましてもよいという法律があったため、ホテルを酒店と呼ぶようになったと台湾で聞いたことがある。

朝食は、洋食と和食が混ざったビュッフェ方式、和食、中華の3種類のレストランがあり、どれかを選択できるようになっていた。

早朝の庭園には、散歩、太極拳をしている年配の中国人を数人見かけた。近くの住民だろうか。それとも宿泊客だろうか。



ホテルの前庭にある噴水



ホテルの前の庭園。奥のドームパビリオンは、クラブハウスの屋上にあったパビリオンに似せて作られたもの。



3日間宿泊した1016号室の窓から眺めた市内。23日には晴天となったが、それでも遠方はガスがかかった状態であった。

内海夫妻との再会

21日、約束より10分早い8時50分にホテルのロビーに降りていくと、すでに内海夫妻が来て待っていてくれた。二人とも今年57歳になっているが、以前とあまり変わっていない。

本社が東京にあるアスクプランニングセンターという不動産企画・設計などを手掛ける大手会社の上海アスクプランニングに勤務していたが、2年前に脳出血で倒れたため、現在は中国人の谷俊氏が経営する上海建博建築設備安裝有限公司という空調設備専門の会社で設計顧問をさせてもらっている。1年前からは奥さんもこちらに来て同じ会社で働いているということであった。

脳内出血をしてから右目の視界が狭くなった

ため、今は車の運転はしていないということで、タクシーで上海市内の珍しい場所を案内してくれた。

内海君は、普段は中国語を使わないため5年たった今でも中国語を話せないようである。奥さんの美枝子さんは、上海に来てまだ1年なのに日常の会話に不自由しないくらい中国語を話することができる。元々語学が好きなのであるが、積極的で物怖じしないことと好奇心旺盛な性格が語学を堪能にしているのだろう。

タクシーの運転手とのやりとり、店での注文はすべて美枝子さんの流暢な中国語に助けられた。

中国語には北京語、上海語、広東語などあり、書き方も発音も違う。共通語は北京語。中国の漢字は簡体字。1950年に中国政府によって簡略化された字体である。香港や台湾では昔のままの繁体字が使われている。日本の漢字は繁体字と簡体字、それに平仮名や片仮名が混ざって最も複雑なのだろう。繁体字であればなんとなく意味が分かるが、簡体字は理解しにくい。

多倫路文化名人街

ここは、日本人街があった虹口の一角。魯迅(ろじん)をはじめ、中国の有名な作家が多く住んでいた。日本人では魯迅と深い親交のあった内山完造らが住んでいた。1998年に「多倫路文化名人街」として観光用に整備された。

私たちが訪れたときには、第8回の奇石展が開催されていて、珍しい石や、化石、宝石などが展示販売されていた。



多倫路文化名人街の入り口



第 8 回の奇石展の横断幕



豚バラ肉そっくりの奇石。色の濃いところは赤身，白いところは脂身で層を成しており，一番外側には薄褐色の「皮」がついている。



由緒ある「老電影珈琲館 Old Film Café」
入り口にはチャップリンの像がある



Old Film Café の前で記念撮影



古本屋

多倫路文化名人街の中にある老電影珈琲館 Old Film Café は，租界時代のお洒落な建物を改造したカフェ。中に入って一休みする。私たちは気がつかなかったが，1920 年代～30 年代の古い映画をスクリーンで上映しているそうである。店はガラガラでお客は私たち 4 人だけ。飲み物は 30 元～40 元と高め。

上海の最も賑やかな繁華街・南京路
南京路(ナンジンル)は中国 No.1 の商業地といわれる場所。外灘を基点に 26 の街道を横切り，上海の中心を通る約 5.5 キロメートルの道路で，道の両側には約 600 の専門店が建ち並び，毎日約

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

170万人の人々がこの道を行き来すると言われている。

ここには、老舗のイトキンが自社ビルを持っているのに加え、ユニクロ、資生堂、伊勢丹、牛井の吉野屋などの日系企業も多く進出している。

道は歩行者天国になっており、観光電動車が走っている。

昼食は、「泰康食品」という食品店の2階にある「泰康湯包館」で小籠包(ショーロンポー)を食べる。小籠包は昨日も食べたが、ここのは格別美味しい。大繁盛しているようで満席。食後ゆっくり座っていると、待っているお客がいるので席を空けるように促された。



繁華街でも洗濯物を窓の外に干している



補修工事中のビル。足場は鋼製のパイプであるが、柵には竹が使われている。

東台路古玩市場



東台路古玩市場の入り口

200mほどの小路に骨董品の屋台が軒を連ねる上海でも有名な骨董品ストリート。さすがに四千年とも五千年ともいわれる歴史を持つ中国だけ

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

あって、いろいろな物が売られている。「がらくた」としか言い様のない物も並べられている。

フクロウの爪楊枝入れ2個を50円で購入した。空港では1個50円で売られていたが、品物が違うので高い買い物をさせられたような気がする。ここで骨董品を買うには、店の人の言い値の5割~6割から交渉を始めるのがよいということであるが、慣れないとなかなか難しい。



ここには中国の古い民家が残っている



中国の弦楽器「二胡(にこ，中国語ではアルフー)」を弾く屋台の老人



戦時中に使われた軍服や軍刀もある



伸縮する長いキセル



外国人客も多い



秦の始皇帝の兵馬傭，毛沢東主席などいろいろな人形が売られている。



毛沢東主席の語録集



毛沢東生誕 100 周年の記念時計



フクロウの爪楊枝入れを買う



東台路古玩市場の前の道路を走るトロリーバス



自動車が増えてきたら信号を無視して渡る。交差点で自動車は信号に関係なく右折してくるので危険。中国では自動車優先。



床屋の散髪の様子

上海万商花鳥虫交易市场

上海万商花鳥虫交易市场は、西藏南路を挟んで東台路古玩市場の向かいにある。金魚、熱帯魚、カメ、さまざまな小鳥、イヌ、ネコ、ウサギ、コオロギなどが売られている。

特にコオロギには驚かされた。普通のコオロギは1匹が5元。鳴き声がきれいなコオロギになると1匹が15元もする。

中国ではコオロギを戦わせる「闘蟋(とうしつ)」が流行している。鳴き声が良いかどうかは、竹製の細い毛束を使ってコオロギを興奮させ鳴かせて判断する。コオロギの寿命は比較的長く、越冬して1年3ヶ月も生きることができる。これは、市場にいた人に聞いた話である。



コオロギを売買する市場



観賞用のイモリ, カエル, カメ



器の中にコオロギが入っている



後の建物はデパート。一階のマクドナルドでコーヒーを飲みながら休憩した



細い毛束を使ってコオロギを興奮させて品評



建設中のビルと地下鉄の標識



水槽にたくさんの金魚が詰め込まれて展示



デパートの地下に入り, 上海地下鉄を見学

新天地

1920～30年代に建てられたモダンな雰囲気
の「石庫門住宅」を修復し、旧フランス租界の街並を再現した「新天地」。上海観光のレストランスポットとなっている。

敷地面積が3万平方メートルほどのエリアにたくさんのおしゃれな店がある。まるでヨーロッパに来ているような錯覚に陥る。

18時から内海夫妻に上海料理をごちそうになる。内海夫妻が勤務している上海建博建築設備
安装有限公司の谷俊社長と奥様の沈さんも一緒であった。

谷社長は5年間日本で働いていたようであるが、日本人と変わらないほどに日本語が上手である。10歳年下という奥さんの沈さんは、中国系とは思えないような顔立ちをした上海生まれの美人。日本語は全く話せないようであった。

中国では文化革命以来、結婚しても夫婦別姓になっている。子供は男性側の性を名乗るようである。

上海料理は北京、広東、四川と並ぶ「中国四大料理」のひとつ。素材の味を生かした料理法や醤油と砂糖を使った甘辛い味付けが特徴で、日本人にも親しみやすいと言われている。

上海生まれの谷さんが選んでくれた上海料理は、想像していた中華料理とは異なり、油をあまり使わずとてもあっさりした味であったので、十分に堪能することができた。



新天地の上海料理のレストランで食事



テラスではビールをジョッキで飲む客が多い

蘇州日帰り観光

・上海から蘇州へ

蘇州市は、かつてマルコポーロが東洋のベニスと謳(うた)ったという水郷の街。上海から約100km西方にある。上海市に隣接する地の利があり、絹織物で発展した。市の人口は600万人。

春秋時代に呉の都が置かれ、呉文化圏の中心であった。「呉越同舟」(ごえつどうしゅう)の越国は今の杭州。「呉越同舟」とは、仲の悪いもの同士が同席する状態を表す言葉として使われているが、これは春秋時代に呉と越が骨肉の争いを繰り広げたことに由来している。しかし本来の意味は、「仲の悪いもの同士が、同じ目的のために一時的に協力する」ことを意味しているようである。

蘇州には、15世紀～20世紀に繁栄を究めた明・清時代に築かれたものを中心に、拙政園・留園・滄浪亭・網師園・環秀山荘・獅子林・藝圃・園・退思園の9つの古典庭園が世界遺産に指定されている。

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

蘇州に散在する庭園は、退官した官僚や地元の富豪たちが隠居生活を楽しみ、客人をもてなす場所として造ったもの。

円形、壺、炎、さまざまな形をしたくり抜き門、一つとして同じ模様のない飾り窓、くねくねと曲がり先の見通せない回廊、奇怪な形をした岩からなる山々など、日本庭園や西洋庭園とは全く異なる不思議な造形がぎっしり詰まった空間、それが蘇州の古典庭園である。

蘇州日帰りツアーには、愛知県から来たという4人組のおばさん連中、同じ花園飯店に宿泊している若い女性、そして我々の合計7名であった。

花園飯店を8時30分に出発。南北高架路(無料)から高速公路(有料高速道路)を通過して南京方面へ向かう。朝のラッシュのため、市内に入る対向車線は大渋滞。南京方面は大した渋滞ではなかったが、それでも蘇州の拙政園に到着したのは11時前。ホテル出発から2時間半かかった。この間一度もトイレ休憩なし。

拙政園に入ればトイレに行けるものと思ってガイドにたずねると、トイレはまだ先の方のこと。トイレに行けたのは、拙政園の観光コースの最後の方。11時半になっていた。我慢をし過ぎたために前立腺肥大が悪化した。

この後、寒山寺、虎丘に行ったが、いずれの場所もトイレは観光ルートの後の方になっていた。前立腺肥大の観光者にとってはトイレが少なすぎる。

・拙政園(せっせいえん)

拙政園は、中国の四大名園に数えられている蘇州では最も人気が高く、世界遺産にも指定されている庭園である。1509年に高級官僚だった王献臣が造成したもの。

蘇州に来た観光客は100%この庭園を観光すると言っても過言ではないくらい、すべてのツアーのコースに入っている。



拙政園の入り口



舟に乗って池の中の蓮の手入れをしている



拙政園には蓮の池が多い



円形のくり抜き門



くねくねと曲がった回廊



浮翠閣 (うきすいかく)

・蘇州の運河クルーズ

寒山寺を見物する前に、寒山寺の横の運河を舟に乗って見物する。所要時間は25分。



寒山寺の横の舟乗り場



江南で一番有名な橋・楓橋 (ふうきょう)



客を舟の先に座らして楓橋をバックに写真を撮らせてくれる



白壁で囲まれた中には別荘(戸建て住宅)がある



最後に、蘇州の写真が入ったトランプを 10 円で販売。

・寒山寺(かんざんじ)

寒山寺は、紀元 502～519 年に創建された寺。当初は「妙利普名塔院」(みょうりふみょうとういん)と呼ばれていたが、寒山と言う僧侶が住むようになったことから寒山寺と呼ばれるようになった。度重なる火災に遭い、現在の建物は清代に再建されたもの。

唐代の詩人張継(ちょうけい)が詠んだ漢詩「楓橋夜泊(ふうきょうやはく)」の石碑があることで知られる。この詩のように鐘の音を聴こうと、毎年年末に多くの日本人が除夜の鐘ツアーに参加している。

1940 年の日本映画『支那の夜』の挿入歌『蘇州夜曲』でも寒山寺が登場する。

楓橋夜泊

この詩は都落ちした旅人が、蘇州西郊の楓江にかけられた楓橋の辺りで船中に泊まった際、旅愁

のために眠れぬまま寒山寺の鐘の音を聞いたという様子を詠ったものである。

月(つき)落(お)ち烏(からす)啼(な)きて霜(しも)天(てん)に満(み)つ
 江(え)楓(ふう)漁(ぎよ)火(か)対(たい)愁(しゅう)眠(みん)に
 姑(こ)蘇(そ)城(じょう)外(がい)寒(かん)山(ざん)寺(じ)の
 夜(や)半(はん)鐘(しょう)聲(せい)客(かく)船(せん)に到(いた)る

[意味]

月は西に落ちて闇のなかにカラスの鳴く声が聞こえ、厳しい霜の気配は天いっぱい満ちている。運河沿いに繁る楓(かえで)と点々と灯る川のいさり火の光が、旅の愁いの浅い眠りにチラチラかすめる。

そのとき姑蘇の町はずれの寒山寺から、夜半を知らせる鐘の音が、私の乗る船にまで聞こえてきた。



大雄宝殿



大雄宝殿の前庭



大雄宝殿の釈迦如来像



五重の塔「普明塔」の上の法輪



寒山寺大雄宝殿前の香炉



三蔵法師の像



奥の建物が五重の塔「普明塔」



張継の「楓橋夜泊」の詩を刻んだ石碑



出口の近くに置かれた巨大な太湖石



寒山寺の出口の近くにあるトイレ

・中国江蘇省絹研究所

蘇州は絹製品の生産地として有名。中国江蘇省絹研究所は、蘇州の観光コースに組み込まれているらしく、我々も連れてこられた。

日本人と思えるほど日本語を流暢に話す男性職員から、最初に、ここは中国政府によって運営されているので品質が保証されているという説明を受けた。そして、蚕の繭(まゆ)から絹糸をくむ様子や、真綿にして引き延ばす工程などの見学をさせてもらった。

最後に絹布団売りに案内され、絹の布団はとても軽い、天然の材料であるので体に良い、アトピー皮膚炎にならない、価格は日本で買うよりかなり安く3分の1以下といった説明を受け、ついつい絹布団を買ってしまった。フルシーズン用の

シングルサイズが1枚¥500。中国人民元は日本円と同じ¥を用いるのでややこしい。500円と思いきや、その16倍である。

布団売り場の二階は土産売り場になっていて、ネクタイ、ハンカチ、スカーフ、チャイナ服などの絹製品がたくさん売られていた。



中国江蘇省絹研究所の建物



繭から絹糸取り(糸くり)



真綿を延ばしては重ねるシルク布団打ち

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

・虎丘(こきゅう)

蘇州での最後の観光地が虎丘であった。ここも蘇州観光ツアーのコースに入っている名所の一つ。

ここは春秋時代に呉王夫差(ふさ)が呉王だった父親の闔閭(こうりょ)を埋葬したと言われていた場所。父親の葬儀の三日後に、白い虎が突如現れ墓の上にもうずくまって墓を守ったと伝えられている。このことから虎丘と呼ばれるようになった。

我々は車で虎丘に来たが、寒山寺から運河クルーズを楽しみながらここに来ることもできる。

虎丘の見所は、中国のピサの斜塔と呼ばれている雲岩寺塔。400年前から地盤沈下のため傾き始め、現在は北に15度傾いている。塔の高さは47m。八角七層の棟瓦造りで、宋代961年に建てられたもの。下部の台座部分はこれ以上倒れないようにコンクリートで固められている。10年ほど前まではこの塔も上ることができたようであるが、現在は禁止されている。



虎丘の入り口の手前の運河。運河に架かるアーチの石橋を渡って虎丘に入る。



奥の塔が蘇州のピサの斜塔と呼ばれる雲岩寺塔



虎丘の中にもお城のお堀のような運河がある



剣の切れ味を試した「試劍石」(しけんせき)



墓の秘密を守るために墓作りの人夫1000人を皆殺しにしたという一枚岩「千人石」



虎丘劍池



雲岩寺塔に入るくり抜き塀



副葬品として名剣を 3000 本埋めた場所。後に秦の始皇帝と呉の孫権が剣を掘り出そうとしたが得られず、その後に水がたまり池になったと伝えられている。この池の石の壁に「虎丘劍池」の4文字と「風壑雲泉（ふうかくうんせん）」の4文字が彫られている。前者は書家・顔真卿（がんしんけい）の筆で、後者は名画家・米芾（べいふつ）の親筆によるもの。



中国のピサの斜塔と呼ばれている雲岩寺塔



劍池の上に架かっている石造アーチ橋。2つの穴が空いていて、水面を覗き込むことができる。



虎丘の中のお堀

上海雑伎団

虎丘もトイレがあるのは、観光を終えて塀の外に出た所。トイレを済ませて 15 時 30 分に出発。帰路は混雑もなくスムーズに走れたので、上海の花園飯店に着いたのは 16 時 45 分であった。

予定では、19 時 30 分から上海雑伎団を観ることにしていたが、17 時 15 分スタートの公演に間に合うということで急遽予定を変更。汗びっしょりの下着と T シャツを着替えて、白玉蘭劇場に行く。以前は 1 日 1 回の公演であったが、最近は人気があるので 2 回公演をしている。

上海雑伎を公演している場所は、商城雑技場、南市影劇院、馬戲城、白玉蘭劇場、雲峰劇院の 5 劇場がある。評判の高いバイク芸が観られるのは、「馬戲城」と「白玉蘭劇場」だけである。ガイドのホウさんは白玉蘭劇場がお薦めということであった。



公演を終えて白玉蘭劇場を出たところ

公演時間は 17 時 15 分から 18 時 45 分までの 90 分で、演目には下記のようなものがあった。

五人の女性による柔軟性とバランス技を見せる五人柔術。数人の若い男性が、一人 3 個の帽子を手に持ってお手玉のように操ったり、キャッチリレーをする爵士礼帽。美しい女性が 1 人 6 枚の皿を細い棒の先で回しながら舞やバランス技を決めていく皿回し。ストリートキッズに扮した少年たちが、フープダイビング(輪の中を潜り抜ける)の技を決めていくフープダイビング。若い女

性達が唐コマを紐に乗っけて、コマを空中に投げ上げてキャッチしたり器用に操る空中独楽。男性が天井から垂れ下がった布を腕に巻いた状態で、女性の手をとって空中を舞いながら愛を語らう空中パフォーマンスショー。筋肉隆々の 2 人の男性が見せる力量という力とバランス技。トランプやハトを使った手品、大きな古時計に入れられた女性が、一度は消えていなくなるが再び扉を開くと 5 人に増えて再登場するなどのマジックショー。最後は直径が 10m に足りない程度の鳥籠のような球の中に、5 人のライダーが入って、縦、横、斜めにハイスピードで円を描きながら走り回るオートバイによる曲芸。

カメラ、ビデオによる撮影が禁止されていたので、ここで映像を紹介することはできないが、下記のウェブサイトアクセスすれば見ることができる。

<http://www.shanghainavi.com/miru/miru.php?id=98>

<http://www.newshanghaicircus.com>

「上海へ行ったら雑伎団を絶対に見るべき」と聞いていたが、とても人間技とは思えない技が次々と繰り出され、感動とハラハラのし通しであった。90 分があっという間に過ぎた。

皿回し、空中独楽、帽子キャッチ、フープダイビングでは失敗が見られた。棒から皿を落としたり、コマをうまく紐の上にキャッチできなかったり、帽子を受け損ねたり、リングの中に飛び込んだときにリングに接触して倒したりといった失敗である。極めて難度の高い技に挑戦しているので、いくら練習をしても失敗をなくすのは難しいだろう。

それにしても、最後のモーターバイクサーカスは迫力満点であった。5 人のライダーの息が少しでも乱れれば大事故につながる。ガイドのホーさんに尋ねると、昨年 1 度事故が起き、病院に運ばれたことがあったそうである。想像しただけでも身震いがする。

公演は年中無休で毎日 2 回行われている。出演

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

しているのは毎回同じ人。舞台に出られるようになるまでには相当量の練習を積み重ねなければならないし、演技ができるのは若い時期だけなので、皆さん休むことなく必死で働いている。

舞台にあがれなくなると生活が大変になる。若い頃に演技一筋に打ち込んで勉強をしていないため、一般の職業に就くことはできない。劇場の切符売りなどの雑用係をするか、レベルの低い劇場に移って演技を続けるかになる。これは、ガイドのホーさんから聞いた話である。

上海蟹を食べる

上海雑伎団からの帰り、ホーさんから夕食として上海蟹料理を薦められた。上海に来て上海蟹を食べないわけにはいかないと考えていたので、ホーさんの薦める蟹料理専門のレストランに連れて行ってもらった。

場所は上海日本国総領事館がある近くで、道路添いに飲食店が軒を連ねた飲食街。日本人向けの「クラブ」を数件見かけた。日本人の多い場所だろう。店内には日本人客が結構多く来ていた。



上海蟹のコース料理



上海蟹専門のレストラン



上海蟹

中国では毎年9月下旬頃から「上海蟹」の季節が始まる。「上海蟹」は日本での通称である。中国で最も知られている呼び名は「大闸蟹」(ダージャーシエ)。上海でも香港でも台湾でもこの名で呼ばれている。

上海蟹は中国各地に生息するが、特に美味とされるのは「陽澄湖」(ヨウチョウコ)及び「太湖」(タイコ)などで産出されるもので、上海から車で1時間強の江蘇省(コウソショウ)にある。

上海・蘇州旅行記 (右城猛)

上海蟹の価格は毎年少しずつ高くなっている。上海補東国際空港でも土産用として生きたまま紐で縛った上海蟹を、1杯 100～150 円で売っていた。

レストランでは、上海蟹のフルコースが一人 400 元(6400 円)であった。上海蟹の美味しいところは、胴体の部分にある蟹ミソ(蟹黄)。足に肉がほとんどない。いろいろな蟹料理ができたが、最後は「蒸蟹」。せいろの中で生きたまま蒸かした蟹である。これを店員が丁寧に、蟹ミソと蟹肉を取り出してくれたので、きれいに食べる事ができた。

あとがき

高知市介良の自宅を 7 時半に出発し、現地時間の 11 時半には上海補東国際空港に着いていた。所要時間は 5 時間。関西国際空港からのフライト時間はわずか 2 時間であった。上海がこんなに近い所にあるとは思わなかった。

また、人口 1850 万人を抱え、超高層ビルが林立する大都会であることにも驚かされた。2010 年の世界博覧会に向けて、高層ビルや高速道路などの建設ラッシュが続いている。2 年後には大きく変貌していることだろう。

その一方で 5000 年の歴史を感じさせる古い建築物や庭園、料理、それに化石や奇岩に出会うことができる。好奇心をかき立てる魅力ある街である。

急成長を遂げているため、上海にはエネルギーがみなぎり街に活気が溢れている。内海君は、ここに住んでいるとエネルギーをもらえて元気になると話していた。

[謝辞]

内海夫妻には、21 日の早朝から夜まで上海市内の珍しい場所を案内していただいた上に、点心料理の昼食、上海料理の夕食をごちそうになった。帰国する 23 日にはわざわざホテルに来て見送っていただいた。お二人にお世話していただいたお陰で、一般の観光ツアーで味わうことができない

貴重な経験をすることができた。お二人に心より感謝申し上げたい。

上海航空の鮑小燕(ホウ・ショウエン)さんには、20 日、22 日、23 日の 3 日間、現地のガイドをしていただいた。限られた時間を極めて有効に使うことができた。中国のことにに関して何を質問しても的確に即答してくれた。1 年後には結婚する予定とのこと。幸せになられることを祈っている。

(2008 年 9 月 25 日)